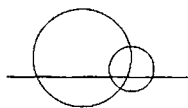


〔東亜同文書院大学記念センター・福岡講演会〕



東亜同文書院大学の資料展示会・講演会

－日中友好の原点を探る－

【司会】 ただいまから東亜同文書院大学記念センター講演会を開催いたします。私は本日司会進行役を務めさせていただきます、愛知大学東亜同文書院大学記念センターポストドクターの武井義和と申します。よろしくお願いいたします。まず初めに佐藤元彦学長よりご挨拶がございます。先生よろしくお願いいたします。

【佐藤】 皆さんこんにちは。愛知大学学長の佐藤と申します。本日は本学の東亜同文書院大学記念センターが主催します講演会を開催いたしましたところ、このように多数お集まりいただきまして本当にありがとうございます。まずお礼を申し上げます。

さて、愛知大学はすでにご案内の通り戦前上海に設立されました東亜同文書院、あるいはその後の東亜同文書院大学を継承して、1946年豊橋の地に設立された大学でございます。東亜同文書院につきましては後ほど本学の藤田教授から詳しい説明があると思いますが、愛知大学がいかに東亜同文書院時代の精神を受け継いだ教育を現在行っているか、その一端につきまして、せっかくの機会でございますので、この場をお借りして少しご紹介をさせていただければと思っております。

今申し上げましたように1946年に豊橋において設立されましたけれども、一貫して中国の教育研究という点では非常にユニークな事業を展開してまいりました。各学部、文学部でありますとか、当時は法経学部でありますとか、そういったと

ころで中国あるいは中国語について教育研究が深められてきたわけでありまして、約10年前に現代中国学部という日本で唯一の現代中国についての学部が設立されまして、併せてその少し前に大学院レベルでも、中国研究科というものが設置されました。それまで各学部あるいは各大学院の研究科にまたがってなされてきた中国に関わる研究あるいは教育というものが学内に集約され、それが愛知大学の1つのセールスポイントとして現在に到っています。

現代中国学部でございますけれども、これも東亜同文書院時代の精神を受け継ぐ形で、たとえば1年生は大学の中で勉強いたしますけれども、2年生の最初は南海大学という天津にある大学に全員が行きまして中国語の勉強をしております。その勉強をするための施設あるいは滞在中の宿舎につきましても、愛知大学と南海大学の提携のもとで設立されたという経緯がございます。

それから現代中国学部の学生は3年生になりましてからは学んで身に付けた中国語を使いまして、中国のさまざまな場所（受け入れの大学によって毎年場所が違います）でそれぞれのテーマに従って、短期間ではありますけれどもヒアリング等々の現地調査を行ない、その成果を参加した学生全員が中国語で発表します。それを聞いた中国側の学生さんあるいは中国側の大学の先生方が、その発表に対して質問し、その質問に対して再び学生が中国語で答えるというプログラムを行っております。

その授業が始まって今年でちょうど10年目と

○

ということで、今年は浙江大学でその授業がございまして、私は成果発表会にだけ顔を出させていただきました。全員が1人5分でありましたけれども研究の成果を中国語で発表し、質問に対してまた中国語で答える。このプロセスは実にいいものであるというふうに自負しているところでございます。さらに現代中国学部においてはインターシップ、いわゆる就業体験も中国で展開しております。

いずれにしてもそうした特色がありかつ非常に中身が濃い教育、これは文科省からも非常に高く評価されておりました、ご存じの方が多いかと思っておりますけれども特色 GP (グッド・プラクティス) と評価される教育の内容であるということで補助金が作られました。あるいはもう1つ、現代的なニーズに合った教育をしているということで現代 GP というのがあるんですが、これもダブルで採択されました。おそらく全国を見渡しても、1つの学部教育でこれがダブルで採択されているというケースは、私が知る限り他にないという状況でございます。

それから大学院でございますけれども、中国研究科というのが現代中国学部より少し前に設置されておりました、こちらにおいても若手の研究者の育成を含めて非常に熱心な教育が行なわれているところでございます。特徴的なのは博士課程において、これは南海大学と北京にあります中国人民大学と連携をしまして、一種のテレビ会議システムを使って授業を行っております。授業は中国語もしくは英語で行なうという形であります。

併せて博士論文につきましては中国側の大学と日本の愛知大学のそれぞれに提出されまして、合格ということになれば博士号が2つ出るという仕組みを取り入れております。この博士号が二重に出るという制度につきましては、最近はそれほど珍しくなくなってきましたけれども、愛知大学がおそらく全国で最初に取り組んだ、もしかすると世界的にも非常に先駆的な例であったと、こ

れも自負しているところでございます。

そのような形で東亜同文書院時代の教育の精神というものが本学に現在引き継がれているということ、この機会に皆さんにお知らせしたいと思います。ですから今日お見えの方々、東亜同文書院の関係の方々もいらっしゃるかも知れませんが、それとは無関係に関心を持たれて展示会をご覧になり、さらには講演会ということでご出席された方も少なくないと思います。お子さんあるいはお孫さんあるいはお知り合いの方に、愛知大学のそういう教育というものをお伝えいただいて、ぜひこの九州の地からも送り込んでいただければと願ってやまないところでございます。

東亜同文書院につきましては、私が俄勉強をしたところによりますと、1901年に設立されて、戦争が終わりを迎えるまで約5,000人の卒業生を輩出したそうでもありますけれども、そのうちの4人に1人は実は九州出身であるというふうに聞いております。さらには中国地方、四国地方も合わせますと、5,000人のうちの約半数が実は西日本の地域のご出身であるということでございますので、そういうようなことも考えました時に、この西日本さらには九州から、ぜひ愛知大学に中国についての勉強をする若い人を送り出していただいて、日本あるいは世界で活躍するというふうなことをご期待いただければと思っているところでございます。

愛知大学という名前をお聞きになって、愛知県にあるからというふうに思われる方のほうが多いかも知れませんが、愛知大学の元々の語源は「知を愛する」という意味でございまして、愛知県の愛知ということではございませんので、そういうことも含めてぜひご理解をいただいて注目をしていただければというふうに希望しているところでございます。かなり大学の宣伝をしてしまいましたけれども、せっかくの機会ですので、東亜同文書院と非常に関わりのある愛知大学のことを、この機会に皆さんにぜひ知っていただきたい

と思います。長くなりましたけれども私の挨拶に代えさせていただきたいと思います。これから講演会が開催されます。どうかよろしく願いいたします。ありがとうございました。

【司会】 ありがとうございました。続きまして東亜同文書院大学記念センター長藤田佳久教授よりご挨拶がございます。よろしく願いいたします。

【藤田】 皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました東亜同文書院大学記念センターのセンター長をやっております藤田と申します。どうぞよろしく願いいたします。このあとの講演会の後半のほうでも私がお話をさせていただきますので、その辺と重ならないように少しお話をさせていただきます。


東亜同文書院大学記念センターというのは、ただいま学長のほうからお話がありましたけれども本学の出自と関係してしまっていて、我々も東亜同文書院大学の研究を進めてまいりました。このアクロス福岡の1階で今日から3日間展示会をやっておりますが、そちらに当時の東亜同文書院と、一部愛知大学の歩みも展示してございます。ああいう歴史を今日の愛知大学の中でも引き継いでいきたい、検証していきたいということがございまして、今から15年あまり前に本学の中に東亜同文書院大学記念センターというのを設けました。併せて展示施設も作りました。

それに関しまして文科省がオープン・リサーチ・センター・プロジェクトというのを立ち上げました。オープン・リサーチ・センターというのはそれぞれの大学が持っている文化的なあるいは歴史的な財産を多くの人に知ってもらいなさいというプロジェクトでして、我々もそれに手を挙げて応募させていただきましたら、ありがたいことに選定していただきました。それが一昨年でしたので、5か年計画の中、今年で2年半を迎えている最中であります。

今回福岡でこういう展示会をさせていただきますけれども、これまでは横浜で、これは他の会と一緒にやりましたけれども25,000人ほど来ていただきました。関東で初めて東亜同文書院のことをPRして、大変我々としてもありがたいことでした。そのあと昨年は東京で文科省が官民一体化ということで高層ビルを作りまして、その上階に我々の大学の東京事務所が移りました。東亜同文書院の経営母体である霞山会(当時の東亜同文会)の理事長が近衛篤磨で、この方の雅号が霞山と言いますが、その名前をとった霞山ビルが文部省の隣にありました。愛知大学もその一角に事務所がございましたが、それを霞山会と一緒に新しいビルの37階へ移ったという記念も含めて、東京で開催いたしました。

それから今日の展示にもございますが、山田兄弟という書院の卒業生が孫文の秘書をやっていたんですね。従って多くの資料コレクションが特に弟の山田純三郎さんの手元に集まりまして、その息子の順造さん(この方も東亜同文書院の卒業生です)が、お父さんの意を汲んで孫文の博物館を作りたいということで資料をさらに収集して努力されたんですが、お体を悪くされて、それではということで一括して本学のほうへご提供いただきました。従って本学には孫文関係の資料も、それまでほとんど日の目を浴びてなかった貴重なものがたくさんございます。その一部も今日は1階のほうに展示してありますので、今日、あるいは明日、明後日、ぜひそれをご覧いただけたらと思います。

山田兄弟の出身地は津軽の弘前でございますので、ぜひ弘前でやってみたらというのを他の方々からお勧めいただいて、今年の7月の終わりに弘前で山田兄弟を中心にした展示会を行ない、地元の人達もお年寄りの方は知っておられましたが、中堅の方々は初めてその実態に触れたというのでずいぶん感激していただきました。来年もう1回やってほしいという申し出までありまして、我々



のほうもどういふふうにしようかと考えているところでございます。その延長で今年はこの福岡の地でさせていただきます。

先ほど学長からお話がありましたように、この福岡県は書院に進学された方が非常に多いんです。あとでまた私の講演でもお話ししますが、東亜同文書院が上海に設立された当初、経営母体の東亜同文会はあまりお金がありませんでした。学校の経営というのはそう簡単ではないということで、初代の根津院長が開学にあたって各県を回り、県知事を説得して各県2人、県のお金で学生を学ばせる。つまり県費生ですね。従って授業料は只で、週に1度はお小遣いをやるという仕組みが原則でした。そうしましたら全国的に非常に希望者が殺到しまして、特にこの福岡県は希望者が非常に多かったんです。毎年2名のところへ希望者が80人から100人ほど来られました。それで福岡県は時には3人、4人と合格させて書院に送り込んだということがございます。従って福岡県の方が書院の中でかなり高い比率を占めたわけですね。そういう意味で福岡の地でやってほしいというご要望がございまして、我々といたしましてはこれを機会に書院のことを改めて、一番大陸に近い福岡で今回開催させていただきました。孫文関係もございまして来年は神戸を予定しております。さらにその次は名古屋でやる予定もしております。

細かいお話はまた後半にすることにいたしまして、今日は「アンパンマン」のやなせたかし先生に来ていただきました。お父様の柳瀬清さんという方が書院の第13期の卒業生です。1901年に開学いたしましたから13期生と言うと1913年入学です。非常に分かり易いですね。あといろいろな

名人の方がおられるんです。浅丘ルリ子さんのお父さんとか。根津甚八さんは根津院長の遠縁に当たるらしいですし、そういう方がけっこうおられます。

今日はやなせさんをお招きいたしました。ちょっとお体の調子が良くないと伺っておりますが、今日のご出席いただき、お話をさせていただけるということで、我々としても大変ありがたく思っております。お父様が書かれた原稿等も下の展示室でその頁を開いてお見せしておりますので、ご関心のある方は1階のほうでぜひご覧ください。

本日多くの方に東亜同文書院のことをご理解いただければ我々としても本望でございます。今回の開催に当たりましては、とりわけ地元の西日本新聞社に大変お世話になりました。西日本新聞社の論説委員の5～6人の方々が東亜同文書院のご出身で、著名な論説委員の方もおられます。そういう先輩のためにもこの催しをぜひ拝見したいというお話をいただきまして、先日新聞紙上で大きな特集版を組んでいただき、大変我々としてはありがたく思っております。県の教育委員会にもご後援をいただきました。この福岡でいろんな方々にお世話になってこの会を催すことができ、大変嬉しく思っております。本日から3日間、あと2日間でございます。書院は特に福岡県とは大変つながりが深いので、皆さん方お友達等お誘いの上ご来場いただければ大変ありがたく思います。

今日はまずやなせ先生のお話から始まりますが、ゆっくりご清聴いただいて、最後までお楽しみいただきたいと思います。私のご挨拶をこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございます。